

舞踊の稽古としての創出プロセスの分析

東島未知^{*1} 柴真理子^{*1} 松村さつき^{*2} 森健太郎^{*3} 日野晃^{*4} 三宅美博^{*2}

Analysis of creating process as practices of dance

Michi Higashijima^{*1}, Mariko Shiba^{*1}, Satsuki Matsumura^{*2},

Kentaro Mori^{*3}, Akira Hino^{*4}, Yoshihiro Miyake^{*2}

Abstract – In this study, it aims to investigate the creating process in practices of dance, from the viewpoint of what practices make the state to center on the Ba. Firstly, the hypothesis of the theory of the dance practices is verified by the logic of the Ba. Secondly, the author searches for a concrete method of practices from the theory of Hino Budo. And walking is taken up as one example of the method of practices, and the vertical shift of walking is measured, and analyzed.

Keywords: Practices of dance, Stage, Walking, Creating

1. はじめに

ここでとりあげる舞踊とは、主に、舞台で行われる舞踊、または舞台で行われなくとも、観客を前にして行う舞踊のことを指す。そして、ここでとりあげる稽古とは、舞台に特化した稽古ではなく、広義での稽古を指す。広義での稽古とは、踊り手の身体が日常においても舞台上においても同じひとつのものでありつながっているものであるということから、日常から舞踊に必要な要素を稽古する、ということとする。例えば、舞踊で何か自分の意図や意志を伝えたい、それを舞台上で実現するためには、普段人と話すときにそれらをきちんと伝えられるよう努める、ということである。踊り手にとって観客という他者を前にしたときに、舞踊には場という働きが深く関係していると考えられ、その場という働きは、舞台本番でできなければならないものを、たまたまできるという偶然を期待するものではない。よって踊り手はそれを舞台上で確実に実現していくために、より多くの質の高い訓練が必要だといえるだろう。

このように、舞台上で観客との関係を築くためには場の働きが必要であり、それは踊り手自身の中で、舞台上だけでなく日常においてもその働きを常に意識していることでそれが可能になると考えられる。そこで本研究ではその両者を可能にするプロセスが「稽古」であると考えた。ここでは場所を中心とした状態をつくる稽古とはな



Fig.1 The picture of dance (dancer: the author)

にか、という観点から、舞踊の稽古の理論モデルを仮説として提案する。

舞踊の稽古の中で、例えば、ある振付家の振り付けを踊るとき、それを踊り手のやりやすい動きとして動いたなら、そこには踊り手の普段の動きしか生まれず、そこに創造的な働きが生まれにくくなる場合がある。それは踊り手にとっての都合のよい動きであり、振付を無視した自己中心的な動きであると考えられることができる。これを本研究では癖ということばと対応させる。逆を言うと、ある振り付けを覚えたり、型を習得したり、指導の中での言葉かけを受けたり、それらそのものを身体に反映させることが契機となって、創造的な働きが行われるということになる。つまり、初期段階として踊り手の自己中心的な動きを一旦取り払い、外部の刺激に対して耳を澄ませる、すると創造的な働きが生まれ、そしてまたそこを出発点とし、この流れが繰り返されていく。つまり、自己中心的な動きがその外部、場所と融合していき、より場所的な働きを持った動きへと変化していく、という

*1: お茶の水女子大学大学院 比較社会文化学専攻

*2: 東京工業大学大学院 知能システム科学専攻

*3: オムロンヘルスケア(株)

*4: 日野武道研究所

*1: Ochanomizu University

*2: Tokyo Institute of Technology

*3: Omron Healthcare

*4: Hino Budo Institute

舞踊の稽古の理論の流れである。

そこで本研究では、1、舞踊の稽古理論の仮説を、場の論理より検証し、次に、2、その具体的な稽古法を武道家日野の理論から探る。3、また稽古法の一例として歩行を取り上げ、歩行の腰軌道を計測、分析し、4、それらの結果から、場所を中心とした状態をつくる稽古とは何かという観点から、舞踊の稽古の創出サイクルを調査することを目的とする。

2. 場の理論から捉えた舞踊の稽古理論

2.1 創出サイクルの理論

清水博の場の論理において自己中心的自己と場所中心的自己の関係から述べる相互誘導合致、そして交互創出サイクルから、仮説を検証する。

ここで述べる「自己」とは二つの自己から成り立っており、一つは「自己中心的自己」もうひとつは「場所中心的自己」と呼ばれる。「自己中心的自己」とは、自己の局在的存在形態であるもので、自他を分離している状態でものを見たり、決定したりする自己のことを言う。それに対して「場所中心的自己」とは、遍在的な存在形態であるもので、自他非分離的な働きをする自己のことを言う。この自己中心的自己が場所中心的自己へ働きかけをはじめることにより、それ自身が変化していき、そして場所中心的自己からの自己中心的自己への働きかけが起こり、相互に合致しようとし始める、これが相互誘導合致と呼ばれる。そして、両者は互いの変化に対して、新しいものを生み出しながらサイクルし続ける、つまり交互創出サイクルを続けている、という理論である。

2.2 場所的な働きを広げる稽古

これらの理論を舞踊の稽古にあてはめて考えると、まず、初期状態として自分の癖のある動きをしている状態は、自己の二領域性を含むうちの、自己中心的自己への働きかけの強い状態で、場所への働きかけはあまり存在していない状態であると考えられる。この段階で、例えば型でも自分以外の人の動きでも、自己中心的自己の外側からの働きかけに耳を澄ませることによって、自己中心的自己はそれらと整合的になるように修正して新しい表現を生み出す。この時点で自分の癖というものが変化し、一旦矯正され場所への働きかけが生まれ、場所からの働きかけも起こる。その変化した自己中心的自己は初期よりも変化した段階として、また新たな初期状態として、そのサイクルを繰り返す。個人的なパターンの動きを含む自己中心的な動きは、このようにして場所中心的な働きの領域を広げていくことができ、どのような状態でもその場に合った整合性をもつ動きをすることができていくと考えられ、この場の論理からする交互創出サイクルが、舞踊の稽古においての場の働きを広げる稽古と考えられる。そして、舞踊の稽古において、場所中心的な働きを広げていく契機となるのは、自己中心的な動

きの外からの刺激であると言えるだろう。

3. 武道からみた舞踊の稽古法

3.1 日野武道

上記のような、場の働きを広げることのできる舞踊の稽古は、武道の要素を多く含んでいる。それは武道が常に相手に対する整合性を必要とするものであるからであるといえる。つまり、場の働きを常にもった自己でなければならないと考えることができるだろう。

その武道の稽古内容を主として舞踊の稽古理論を説明する。本研究では武道家である日野晃の稽古法に着目した。現在日野の武道理論は、舞踊にとって必要な要素を多く含み、フォーサイスカンパニーを率いる振付家ウィリアム・フォーサイスも取り入れ、またそのダンサー達も武道の要素を多く舞踊に取り入れている理論で、人との相互の関係でしか成立しない「日本伝統武道」の側面から、動きや表現の本質を取り入れている。この理論のキーワードは「相手を・からだを感じる」であり、自分の思う自分ではなく、他人から見た自分、また他人を思うのではなく、他人を感じられる自分を作ることで、他者とコミュニケーションをするということである。

3.2 舞踊の稽古として

このような要素が、舞踊に必要な要素であるというのは、舞踊にも他者が存在しているからであり、また2章で説明した創出サイクルが行われる具体的な方法だからである。例えば、武道において敵に「突き」をする場合、自己のやり易い「突き」で相手を動かすことはできない。これは場への働きかけのない自己中心的な動きで「突き」をしているからであり、相手への働きかけがない状態であると考えられる。そこで結果として、武道では相手の身体を動かさない、という状態になり、ではどうするか、という工夫をする段階に入ることができる。ここでいう相手の反応は外側からの働きかけであり、これを契機として、自己中心的動きを内側だけの働きをするものではなく、場へ働きかけるものへと変化させていく。

舞踊での自己中心的自己の働きの強い動きとは何か、一つ癖のある動き、個人のパターンである動き、とあげることができるが、実際にこれらを判断したり見極めたりすることが難しいと考えられる。そこで、自己の閉じた領域から、場への働きかけのできる自己へと変化していくための舞踊の稽古を、武道の要素の中を探ることが有効であると考えた。

3.3 具体的稽古法

本研究では日野理論の中から「胸骨」というキーワードに着目した。それは日野によると、胸骨は脊椎から繋がる腸骨筋と大腰筋（俗に腸腰筋やインナー・マッスル・体幹等と呼ばれている）を稼働させる役割を持ち、運動にとって重要な手や足から力を出しやすくなるということに繋がり、肋骨から上の上半身の自由性が生まれたり、

腕の稼働領域を広げたりすることが出来る、と述べている。そして、「胸骨を通した脊椎の運動は、骨盤の運動を促し下半身の自由性を増す、脊椎運動を通して身体を連動させ、手や足から力を出すばかりか、運動効率を高める“身体の要”とも言えるものなのである。」と述べている。そしてこの「胸骨」から歩くという具体的な身体の動きを稽古するという方法に注目した。歩くということは前後左右に進むということであり、進む時に前に倒れることを胸骨から出発させ、倒れる前に足を出すということで、自然な動き、必然的に生じる動きであると考えられる。この動きは外部からの刺激に反応して生まれる動き、つまり場への働きかけが存在する動きであると考えられる。そして、運動の中心にある胸骨から歩くことによって、身体を自己中心的自己の状態から解放することができると思われる。

4. 事例としての歩行の稽古

4.1 歩行の稽古と舞踊の関連

舞踊の稽古の一つとしてなぜ日常の歩行を稽古する意味があるのか、それは前述したとおり生活のすべての要素が舞台に関わってくるということであると述べたが、それは歩行そのものがその人自身を表しているということと関連している。そして同じように舞踊はその人自身を表現し、また表出させているものである。つまり、動きという点に関して、「その人自身を表現している」ということで踊ることと歩くことは共通性があると考えられる。

また、「その人自身を表現している」ことには、自分で意図して表現していること、また表現されてしまっていることがある。人の動きにそれぞれ特有のものがあつたり、くせがあつたりするが、それもそのうちの一つに含まれるであろう。それは特に自己の無意識的な領域、また習慣的な動きに含まれると考えられる。『舞踊学言論』の著者、M. ドゥブラーはこのことを、「動く」が個人のパターン、欠点の多いものであり習慣的な運動の状態で示されると述べている。

4.2 著者の歩行の変化

本研究では、歩行の稽古を、2009年の2月から5月の4ヶ月間、対象を著者本人として実施した。その間に著者に集中的な稽古が2月16日～19日¹（以下稽古1）、4月26日～29日²（稽古2）にあったこと、また舞台の公演が3月17,18日（舞台1）、4月25日（舞台2）にあったことを考慮する。実験は上記の歩行の稽古の実施による歩行の変化を計測、分析することにより、稽古としての創出プロセスの変化を調査することを目的とした。

¹：お茶の水女子大学舞踊教育学コース 実技集中講義
講師：日野晃

²：Real Contact in Osaka workshop 2009 4/25~29
講師：日野晃

具体的には、腰軌道計測装置を実装したパソコンを用い計測を行った。仙骨の上部にセンサーをとりつけ、バンドで固定した状態で、30メートルの歩行を計測した。歩行方法は、「舞踊において（本人が目指す）理想的な歩行」を意識して試行した。得られたデータから腰の上下振幅を測定し、それらの平均および標準偏差を算出した。また、歩行のゆらぎを分析するために、MATLABを用いて加速度のスペクトル解析を行った。

歩行時の腰軌道の変化を、直接軌道を描くグラフであらわしたのが図2であり、青色の波で表される軌道が腰の上下移動を横からみた軌道を描いたものである。

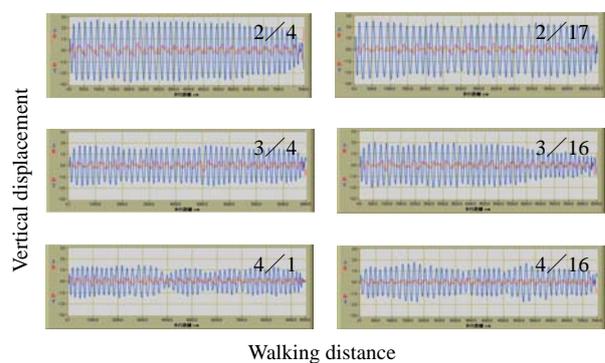


Fig.2 Waist orbit of walking

この図2のグラフから、稽古とともに主に歩行時の腰の上下振幅が変化していることが明らかになった。そこで、上下振幅の絶対値の平均、また標準偏差を日付ごとに算出し、図3にまとめた。

上下振幅の絶対値平均は実験を始めた初期に比べて小さくなっており、また標準偏差についても同じことが言える。これらの結果を実験の始まる時期と終わる時期で比較すると、同じ「舞踊において（本人が目指す）理想的な歩行」でも、4ヶ月間で量的に変化していることが明らかになった。

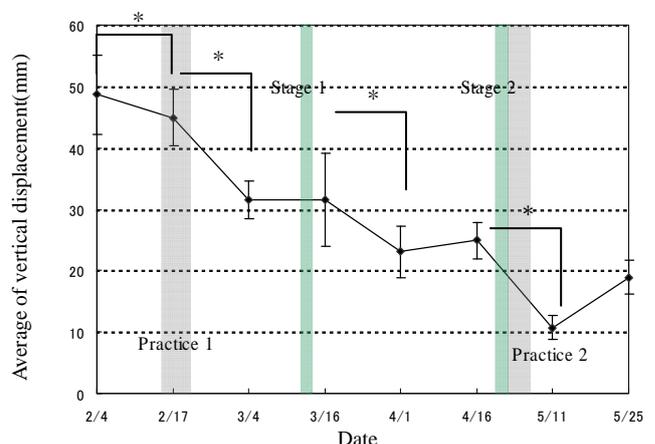


Fig.3 Temporal development of amplitude of vertical displacement in the process of dance practice (*:p<0.01)

また、上下振幅が減少しているということと、被験者本人の舞踊活動および日常生活の歩行において気をつけていたことには関連があると考えられた。本人の集中的な稽古の日付と実験結果を照らし合わせると、上記の図3に示したようになった。この結果から、それぞれの稽古の後に上下振幅が有意に減少していることが明らかになった。つまり、これらの稽古が影響し、歩行に量的変化がみられたと考えられる。

4.3 歩行における創出サイクル

2章3章で述べたような、自己中心的自己が場への働きかけを行い相互誘導合致がおこり、創出が起こるといふ稽古の理論を考えると、2月4日から4月1日の期間では、集中的な稽古1が契機となり、自己中心的自己の働きによる動きが変化した可能性がある。そして、その変化は上下振幅の減少として現れたと考えることができる。また、稽古2についても同じことが考えられる。つまり、初期状態の自己中心的自己への働きかけの強い動きが、稽古という外部からの刺激によって変化し、段階を経て場所的働きを持った動きへと変化する稽古のサイクルをこの結果から解釈することができる。更に、これらについて加速度のパワースペクトルによる分析結果(図4)が、この変化を裏付けるものとなる。

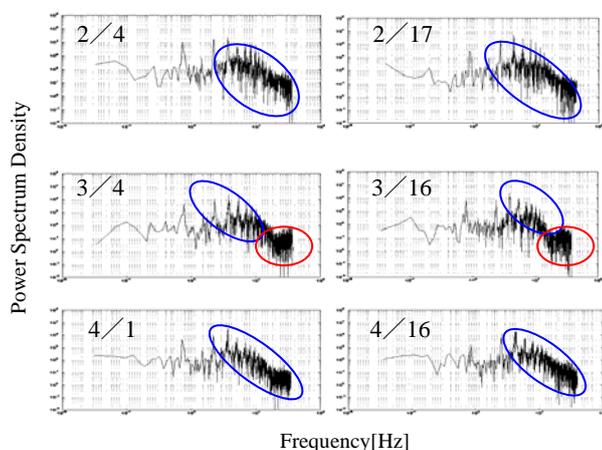


Fig.4 Power spectrum of vertical displacement

2月4日、17日はパワースペクトルの青枠の領域における傾きが直線的であるのに対し、3月4日と16日には赤枠で示した高周波領域に上記直線から逸脱する領域が現れている。これは、意識的に操作することのできない高い周波数帯での身体の動きが変化していることを意味しており、動きの変化は形や量だけでなく、無意識的な面からも変化が生じていると考えることができる。特に、この高周波領域のパワースペクトルの傾きは水平に近く、無意識的な速い身体の動きが無秩序化していることを示唆している。さらに、青枠で囲まれた低周波側では勾配が持続しており、二つの運動制御機構が共存している。

ここで低周波の意識的な動きを自己中心的自己の働き

による動き、高周波の無意識的な動きを場所中心的自己の働きによる動き、として捉えると、両者は3月4日に分離しており、4月16日には合致している。これを舞踊の稽古として考えると、この一連の流れは、初期状態から意識的に外部の刺激に対して反応し、自己中心的自己を変化させていくにつれ、徐々にその変化が安定し、再び初期の状態になると解釈できる。しかし、図3からも分かるように、2月4日と4月16日の歩行は、異なるものとして捉えることができるので、初期状態としてその状態は同じものではなく、より場の働きをもった自己中心的自己として変化したといえるだろう。この稽古の理論は、稽古1で終わることなく稽古2でも続けて生じていると考えることができる。

5. まとめ

本研究では、自己中心的自己の働きが、場所中心的自己の働きをより広げる変化を可能にする稽古とはなにか、という観点から、舞踊の稽古の創出サイクルを調査することを目的として研究を行った。まず場の論理からの考察、そして日野武道による具体的稽古法、更に歩行の腰軌道計測を行い、それらから明らかになったことは、

- 1、舞踊では個人のパターンである動き、くせのある動きを自己中心的自己の働きの強い状態であると考えられ、外部の刺激に働きかけることにより、場所中心的自己からの働きかけが行われること、それらの交互に繰り返すことにより創出が生まれサイクルすることとなり、舞踊の稽古そのものがこの創出サイクルであること
- 2、上記のようなプロセスの具体的な方法として、武道における他者との関係から、また身体の動きという観点から、舞踊の稽古に必要な要素であること
- 3、歩行という運動の量的変化、また無意識的な変化からも、舞踊の稽古としての創出プロセスを見出すことが可能であったこと

そして、これらのことから舞踊の稽古において、自己中心的自己の状態にある動きは、外部の刺激への働きかけを行いそのプロセスを繰り返し創出サイクルを続けることによって、場を中心とした働きかけのある動きを獲得していく可能性が考えられ、このような稽古による観客や他者を巻き込む舞踊の可能性が示唆された。

参考文献

- [1] M. N. ドゥブラー：舞踊学原論；大修館書店(1989)
- [2] 清水博：生命知としての場の論理；中央公論社(1996)
- [3] 清水，久米，三輪，三宅：場と共創；NTT出版(2000)
- [4] 日野，押切：ウィリアム・フォーサイス、武道家日野晃に出会う；白水社(2005)
- [5] 世阿弥：花伝書；講談社(1972)
- [6] <http://www.hino-budo.com/>